

《正岡子規（36）の続き》その297

天涯茫茫

五百木飄亭の続き

子規がおのれの文学の後継者たることを虚子に求め、拒否され絶望。その気持を、内地帰還してまだ召集解除にならず広島に滞在中の飄亭にブチマケたのはその翌日の明治28年12月10日。

「貴兄は氣を落ちつけて読んでくれ給へ」と前文したこの手紙は、子規の全身全霊を吐露したというべきものである。

まず碧虚二子の比較から、碧梧桐を捨て虚子を取り、明日をもちかれぬ身の相続者は虚子と定めたこと、しかもこの相続者のたしかなこと、自ら人を鑑定する明を有すると恃んでいたことは、貴兄はじめ誰もが信じていたと思う。

その人を観るの明を失わせたのは、実にひとりの貧書生高浜虚子である。最早、小生の事業は小生一代でその運命の短いことを歎じ、小生の頭脳中の幾多の文学思想は、水子ともならず闇から闇に葬られることだろうと書く。

神戸から須磨に移って病を養っていたときも、虚子に忠告、後継者なりと明言し、学問の二字を伝えること数百度以上であったろう

と。それから前日の道灌山でのいきさつに移る。

君は学問する気ありや否や

千問万答、終に虚子は左の如く言ひきり候

「文学者ニナリタキ志望アリ 併し身後ノ

名譽ハ勿論一生ノ名譽ダニ望マズ

学問セントハ思ヘリ 併シドウシテモ学問

スル氣ニナラズ」

つまり一言にしてつづめれば、文学者にな

らんとは思えども、いやでいやでたまらぬ学

問までして文学者になろうとは思わずとの

答。

以下なお千数百字あるが省略して、虚子と分れ痛む腰をいたわりつつひとり歩む子規の眼中には涙が浮んだ。共に心を談ずべきもの唯貴兄あるのみとあって、飄亭を重んじている。

このような経過はありながらも、子規は虚子も捨てず、碧梧桐も捨てず、この数年後の明治33年4月13日、碧梧桐宛に「飄亭と鼠骨と虚子と君と我と鄙鮮くはん十四日夕」と短歌のはがきを出す。「日本」新聞記者の寒川鼠骨が筆禍によって入獄していた出獄祝い、家人の作る筍鮓で宴を開くのである。これらの人達は、極めて親しかった。

飄亭の俳人としてのつきあひもこの頃までで、近衛篤磨公に知られて、公の主宰する雑

誌「東洋」に関係することとなり、「日本」を退いた。しかし「東洋」は長く続かず廃刊となり、再び「日本」に復帰して編集長となった。しかし間もなく「日本」社を退社し、新聞記者生活を約8年で打ち切り、無職の浪人生活に入った。浪人といっても、東亜の経緯について、世論の喚起につとめた。

以後、昭和4年、政教社の雑誌「日本及日本人」の主筆となり、死亡まで続けた。

浪人生活30年は大陸問題に心を傾け、大東亜建設を主張し、憂国経世の国士と称された。今日から見れば、軍国主義の先導者で、第二次大戦の日本の敗戦をもたらした張本人のひとりと云えるかもしれない。

子規が明治26年、東北行脚に出発するとき、飄亭は偶然、上野駅で子規に会って見送り

松島で日本一の涼みせよ

の一句を送別句として贈った。これに対し子規は

松島の風に吹かれんひとへ物

の句で報いた。そのときの子規の服装は、裾を引く袴に駒下駄だった。夏だったから衣服はひとへ物だったのだろう。

日本三景の一の松島だから、日本一の涼みという文句が生きている。飄亭の即興句の巧みさ。
(この項終り)